

若手の会シンポジウム報告

- テーマ:「若手の会の歩みと今後」
- 日時:平成22年5月30日(日)13:30~15:00
- 場所:広島大学(会場:K116教室)
- シンポジスト:木村美智子先生(茨城大学教育学部[被服])
小池孝子先生(日本女子大学家政学部[住居])



<2010年度 若手の会幹事>

佐々 尚美(武庫川女子大学 生活環境学部)	小板橋 恵美子(日本女子大学 家政学部)
坂本 千科絵(甲子園大学 栄養学部)	佐藤 真理子(文化女子大学 服装学部)
藤田 智子(大妻女子大学 家政学部(非))	李 秀眞(日本学術振興会 白鷗大学(非))
末弘(田中)由佳理(武庫川女子大学 生活環境学部)	松田 佳奈(宇都宮短期大学 人間福祉学科)

1.若手の会設立の経緯、エピソードの紹介：木村美智子先生(茨城大学教育学部[被服])

若手の会の活動は、15年前の1996年から活動が始まった(当時は仮称)。1995年に阿部幸子先生(当時の日本家政学会副会長)より、家政学会で若手の人の意見を入れていきたいので、若手の会(仮称)を発足して欲しいという話があった。自発的に活動が始まったわけではなく、家政学会自体が様々な意味で危機感を感じている中で、若い人の考え方について知る必要があるということで、声をかけられる形であった。学会員として、今後を考える良い機会ではないかということで、引き受けた。生活経営部会では、同時期に若手の会の活動が自発的に始まっており、連携が必要と考え、衣・食・住・生活経営の各部門のパネラーに参加してもらいシンポジウムを行った。

その後の活動としては、まず、若手会員の意見を集約する目的で、40歳未満の人に対して調査を行い、学会誌に結果を報告した(参照:日本家政学会誌Vol.48(1997), No.10, pp.945-948)。10数年前は、家政学の位置づけ、社会における立場が大きく揺れ、大学の再編、学部・学科名称の変更などがあり、家政学に対する危機感が大きい時期であった。現在は、ある程度、淘汰されたといえるが、学問の世界、社会において、家政学がどれだけ必要とされているか、家政学研究者が抱える悩みなどは、15年前とさほどかわっていないのではないかと。社会がどれだけその学問を必要としているか、つまり、家政学が、社会にどう受け入れられ、社会が望むことをどれだけ達成できるかが今後の家政学の存在意義にかかわっているのではないのだろうか。これは、家政学だけの問題ではないし、学会で、個人で考えていく必要性があるのだろう。

96, 97, 98年、3年間、活動に参加したが、97年には「若手の会」が仮称から正式名となり、先ほどの調査結果を報告した。98年には、女性科学者研究者会議会長であった数野美つ子先生に、女性研究者の視点から話をさせていただいた。家政学会は、女性の研究者が多いことがあり、女性の視点から、科学者として、研究者としての歩みについて話していただいた。

最初は、本部から頼まれて始まった若手の会であるが、実際に必要であるという意識があったからこそ、15年も若手の会が続いてきたのではないだろうか。悩みや課題は大きく変わるものではなく、毎年、課題を抱えながらやっていくものなのではないかと考えている。

2.若手の会(全国)の活動紹介

今までの活動としては、まず、1996年から活動が始まり、1997年は家政学に関する若手の意識・実態に関する調査報告が行われた。1998年~2001年までは、アンケート結果を受け、講演会や座談会など、研究者として既に活躍なさっている先生方から、教育・研究者として必要なこととお話いただくという企画が行われた。専門家として社会にどのようなことを提言できるか、国際社会への発信、ネットワークづくりの必要性、女性研究者の生き方についてなどの話があった。その後、研究者としての資質を高めることを目的に、科研費をどのようにとるのか、留学についての企画が行われたのち、家政学を活かすという形で、3年間、企業との連携、産官学連携、

専門領域を超えたネットワークづくり、といった企画がなされてきた

1996年の調査において家政学の課題として、①家政学(定義や意義)を社会・世間一般にもっと知ってもらう必要性。②研究領域の広さ・学際性・複合性を生かす。③家政学研究の研究・教育面での資質を高める。が挙げられているが、現在でも、家政学の定義、独自性についての議論の不足(家政学研究者としての自信や誇り)、ネットワークの必要性といった課題は大きく残されているのではないかと。

3.若手の会支部および生活経営部会の活動紹介

生活経営部会(中山節子先生 千葉大学):会員規定は40歳以下で会員数約30人。活動内容としては、①交流会:部会長経験の先生からお話を伺う、②研究会:専門家の先生によるセミナー、意見交換を中心とする、③夏季セミナーに合わせたネットワークづくり。課題は、主力会員が30代後半となり、新会員をどう確保するか、校務や子育てに忙しい時期に差し掛かるため学会の仕事が後回しになってしまいがちなのでどう解決するかである。

関西支部:2003年発足、当初は交流会のみであったが、現在は、講習会と交流会を行っている。講習会のテーマは、公募型研究費(外部資金)を取る方法、アンケート調査の基礎、統計(SPSSなど)、効果的なプレゼンテーション、よりよい授業を行うためになどである。交流会は、大学院修了後の進路、院生の就職情報収集、卒論・修論についてなどである。参加人数にバラつきがあり、いかに人を集めるかが課題である。会員は131名。名簿上は増えているが、確認作業が不十分なことと、新規加入の募集が課題である。

中部支部:この3年間の活動について、報告する。研究活動(ニュースレター)、講演会、学習会、ミーティングの4つを行ってきた。研究活動としては、HPにニュースレターを掲載している。食育・服育・住育をテーマとして、各研究者が執筆。今年度は、中高の家庭科の先生が教材として使えるものを作成である。講演会としては、食育・服育・住育をテーマに各専門家の人に来ていただく、三省堂のサイエンスカフェの開催(本部と共催)などである。学習会では、自分の研究や授業についてプレゼンし、参加者が評価しあう。年に3~4回行っている。ミーティングも学習会と合わせて開催。会員は16名。勉強会の参加者は6~7名。原則として50歳未満。30代は少ない。大学院生の獲得のためにも、支部からの許可を得て、交通費の一部を補助している。

関東支部:2003年発足、現在は8名の幹事がいるが、全会員数は不明。年3回の幹事会、メーリングリストによる意見交換。2004~2007年に統計基礎講座、2008・2009ワークライフバランスに関するパネルディスカッションを開催。今後の課題としては、参加人数の確保のため、企画内容、広報活動の検討が必要。

4. 意見交換会(議題:今後のあり方(方向性や支部との連携)、初代幹事や支部・部会幹事への質問等)

【メンバーの集め方、会員情報の更新】

- ・関西支部では、支部立ち上げの際に、45歳以下の全ての会員に往復はがきで会員募集の案内をした。
- ・関西支部では、勉強会の講師料は支部から出ている。
- ・支部では半年に1回程度、定期的に行っているが、全国では年1回開催で、人数の集まりがいまいちなので、もう少し企画等を考えるべきではないか。
- ・関西支部の若手の会に入ると、全国の若手の会にも入るはずなのだが、今までリンクしていなかった。今後、もっと連携を進めるべき。ただし個人情報の管理の問題も考えるべき。MLの活用が有効か。支部のない地域、あっても活動が活発でない可能性もあるので、活動状況をもっと把握。
- ・所属や年齢など、条件に満たされなくても名簿に入ったままになっている。
- ・公開講座として、無料にする。そのために、支部、支部の先生、院生、高校の家庭科の先生への宣伝や本部からの支援を得ている。
- ・中部支部ではネットワークづくりに重点を置いているが、実際には、本務が忙しく、ネットワークづくりに労力を割く余裕がない。どうしても年一回の企画などになってしまう。

【活動の内容、メリット】

- ・活動に参加するメリットはどこにあるのか。年齢層、立場(常勤、任期付き、院生)などの違いが大きく、ニーズも様々。

- ・研究中心の会にすると参加のメリットがあるのではないかと。だが、家政学は幅広い学問なので、テーマを絞りきれない。統計は共通テーマにしやすい。
- ・研究分野ごとの若手の会にしてはどうかといった意見もあったが、教育学部の所属先生からは、様々な分野の研究の新しいトピックを聞く利点が挙げられ、研究分野で固まるだけでは良くないのではないかと。
- ・多様なニーズをどのように吸収し、企画を行うか。→若手の会に参加するメリット、参加者の増加。

【家政系教員の立場】

- ・家政系の教員が少なく(各校1~2人)、同世代の研究者もあまりおらず、研究について相談する相手が近くにいない。研究の方向性など、相談の場が欲しい。これから先の研究の方向性を考える場になれば良いのではないかと。
- ・家政の各分野を超えた連携が若手の会を通して取ることができるのではないかと。連携を取るためには、どのように活動を活発にすれば良いかと。

5. 今後の方向性、支部との連携についてパネルディスカッション

パネリスト: 木村美智子先生(前掲) 小池孝子先生(日本女子大学家政学部[住居])

【木村先生】

- ・活動費用についてだが、当初もお金が全くなかった。2回目以降は、公募企画担当の先生からの助言もあり、お金をもらうようになった。学会の方にアピールをして、お金をもらう。
- ・会員が集まらないことについては、来たいと思わせるテーマ、来るメリットがあるもの。研究費の確保の方法などは誰も興味がある内容ではないかと。
- ・大学の授業評価が最近よく言われるので、自分の講義、プレゼンを見てもらい、互いに意見を出し合う等も良いかもしれない。
- ・研究については、一つの例(テーマ)を上げ、課題など、別分野の視点からの議論するのもよいのでは。
- ・自分がやっているテーマと別分野の研究との連携について、自分の場合は、さまざまな大学のHPを検索し、直接や、知っている人を介して、別の分野の人との共同研究を行っている。

【小池先生】

- ・全国版の若手の会は、年に1度の企画であり、もともとは上から頼まれて、発足したという経緯もある。本部との連携が感じにくい部分もあり、若手の会は何のために活動を行うのかということを考える必要がある。
- ・幹事の活動を通してネットワーク作りができたとは思いますが、幹事だけが感じているのではないかと。学会に対する貢献は何ができるか。
- ・支部の活動との連携、本部の役割として何ができるか。各支部の会員募集の工夫や企画などを相互に参照しあえると良いのではないかと。
- ・分野を超えた研究の重要性。家政学の独自性とは何か、他領域の研究者が集まる意義を考えることが必要ではないかと。他分野の研究者とのつながりから研究に発展していくといったように、若手の会がネットワークづくりの場として活用できないかと。

【フロアより】

- ・若手の会に参加する意義。幹事としてではなく、会員として感じたメリットはどのようなものがあるか。
→自分はメリットがあったと思う。転職組だったが、若手の会の企画の話聞くことで、研究者への道が開けたと思う。留学に向けて、企業の方からの家政学の貢献といった話が印象に残っている。
- ・MLの活用。他の領域では、MLを活用して、質問したりすると有効。
- ・若手の会で、分野を横断したプロジェクトを作り、科研費に応募するとどうか。注目も受けるのでは。
→若手の会を利用して、研究費の獲得というのも一つの在り方ではないかと。

【小川先生(家政学会副会長)より】

本部から言えることとして、若手の会の活動に、本部では期待している。中部支部でも実際、若手の会に対して支援を行ってきた。昨年度から、支部に対して決まった金額を支給するのではなく、企画を本部に申請し、本部が認めた場合には補助金を支払うという形になったので、積極的に支部長を通し、本部に企画を出して欲しい。

い。若手の会と支部の活動に対して補助を行う目的としては、家政学とはどのような活動をしているのか広報が可能になること、若い方にできるだけ家政学会に入ってもらおうということが挙げられる。

【佐々井先生(若手の会担当理事)より】

組織としてのやり方がずいぶん変わったので、早めに企画をして出して欲しい。お金の使い方等も変わった。いつもプログラムにも出しているので、早めに企画を出していただくことで援助できると思う。